

日付:2016年4月24日／聖書:ヨハネの黙示録7:9～17

説教:「目から涙をことごとくぬぐわれる」

「神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれる」(17節)とはどのような涙か。16節に、「彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。」とある。…ということは、彼らは、すなわち、当時のキリスト者は、飢えを強いられ、渴きを覚え、太陽のような熱さで苦しめられたということか。皇帝崇拝を強要される中で、それを拒否し、信仰を貫いたキリスト者の迫害がそこにはあったということであろう。その試練の中でつづられたこの黙示録。「あ～、今は迫害の無い、平和な時代に生きて良かった、平和な日本に生まれて良かった」と言う者か？ 私たちは、正直、そのような思いになる者。今は、自由に信仰を守ることが大抵は許され、いい時代なのかも知れない。ただ、確かに目に見えて、国家権力による信教の自由を奪う状況の下ではないかも知れない。しかし、歴史は繰り返す。歴史から学ぶことは、非常に大事になって来る。

近年、にわかに戦争の足音が聞こえ出していると感じるのは、私だけではないであろう。今、日本の政治は、かつての戦争を始めた日本に逆戻りし、戦争が出来る国づくりに励んでいるように見える。「特定秘密保護法」の強引な成立、「集団的自衛権」行使の憲法解釈の容認、「安保法制関連法案」の強引な審議可決など。…そして、「辺野古新基地建設」の強引な実施。平和を願うがために、声を上げ、座り込みを続ける人々を、まるでブルドーザーで押しつぶしていくかのように排除し、暴力を公然と実施する政府の在り方に、危機感を覚える。

先日、A.N姉が証しをしてくださった。「公立の学校の先生は続けられません。君が代斉唱の時に立つことは出来ない。でも座れば、他の皆さんに迷惑をかけてしまう。だから公立の先生は出来かねる」という。この証しをゲート前ゴスペルの時にも証しされた。大きな拍手が起こって、涙を流される方々もおられた。あるご年配の牧師が私のところにも来られて、久々に感動し涙が込み上げてきて、感謝の祈りを捧げたとのこと。この出来事は、まさに殺伐とした現実社会の中で、時代の流れに何も考えずに身を任せる者が多い中で、良く考え、損得に左右されず、信仰の決断をもって行動したということ。このことは、「目から涙をことごとくぬぐわれる」ことに繋がる証しになるのだと思う。そこに、私たちの牧者となってくださる イエス・キリストが見えてくる。(神谷)